

わ げ ん あ い ご
和顔愛語

医療法人 真生会
真生会富山病院
SHINSEIKAI TOYAMA HOSPITAL

2019
vol,28

- 💡 真生会 透析治療の現在 センター化1周年を迎えて
- 💡 新任医師の紹介
- 💡 電子カルテを独自に作成 情報室
- 💡 ユニフォームが変わりました！
- 💡 認知症の方の家族や介護者へ、関わり方のポイント
- 💡 Dr. 佐々木の中国訪問記～黄河三門峡病院と調印～



腎臓病教室の開催

3月の第2木曜日は「世界腎臓デー」と定められ、腎臓病の早期発見と治療の重要性を啓発する取り組みが世界各地で行われています。当院でも毎年3月に「腎臓病教室」を行っています。講師を務めたスタッフの感想を紹介します。

まつだ まりこ
【松田 真理子看護師（糖尿病療養指導士）】

糖尿病腎症はある日急に発症するのではなく、長年の経過で腎臓が傷んでいきます。しかし、血糖のコントロールをしていれば腎症が急に進むことはありません。糖尿病だけでなく、高血圧や加齢など腎臓が悪くなる要因はいくつかありますが、良いと思ってしていた健康法が意外と腎臓に悪かったということも少なくありません。患者さんと一緒に腎臓病について学んでいきたいと思いました。

そうまん ようすけ
【惣万 洋輔医療ソーシャルワーカー】

透析の費用負担を軽減する制度について紹介しました。実際に申請が必要となった場合、病状や所得、年齢によって受給できる内容が変わります。申請し、適切なサービスを受けていただけるように、お手伝いいたします。医療ソーシャルワーカーへの相談依頼については、最寄りのスタッフに声をおかけください。



会場みんなで体を動かし、腎臓病を予防！

個々の患者さんへのケア
看護師が日常生活のアドバイスを行う「CKD（慢性腎臓病）外

透析の効率が悪くなると体に毒素がたまり、寿命にも影響を及ぼします。健康な人は食事のたびに腎臓が働いて、毒素が適切に排出されますが、透析患者さんは週に3回の透析が腎臓の役割を果たします。

「この一年間は業務のシステム整備を中心に行ってきました。2年目は個々の患者さんに合ったケアを充実させていきたいと考えています。」

劇団 TIPS が腎友会に

「劇団 TIPS」は、当院の放射線技師、看護師、理学療法士、管理栄養士、歯科衛生士、施設管理課スタッフ、フロアマネジャーで結成された演劇集団。劇を通じて健康に関する豆知識（= TIPS）を楽しく学んでいただくと院内外で活動しています。6月9日（日）には昨年に引き続き NPO 法人富山県腎友会の定期大会にご招待いただき、透析患者を主人公にした劇を上演しました。劇中では富山県腎友会の池田充会長（右下写真中央）との共演も実現し、会場から大きな反響がありました。

劇団 TIPS は今後も地域の皆様からのオファーをお待ちしております。



臨床工学技士の役割

現在、5名の臨床工学技士が勤務しています。医療機器の専門職である臨床工学技士は、患者さんの透析前後の検査データを調べ、透析の効率が良くなる（体内毒素の除去率が上がる）ように透析時の設定を変えています。（←）

透析室、腎臓内科、泌尿器科が連携し、南館1階の新たなスペースで透析患者さんに対応するようになってから1年が経ちました。昨年9月には新システムを導入。これにより今まで手書きで記録していた患者さんの体重や血圧等のデータをベッドサイドのモニターで把握し、患者さんの状態を見ながら適切に体調管理ができるようになりました。受入れ患者さんの増加に伴い、透析を開始するまでの準備にやむを得ず時間を要しています。待ち時間に伴う負担を軽減するうえで、システムの改善が大きな効果を発揮しています。

真生会 透析治療の現在 センター化1周年を迎えて

平成30年5月に南館が増築した直後と比べて現在の受入れ人数は2倍になり、医師、看護師、臨床工学技士らのスタッフが協力して治療にあたっています。森田茜看護師（下の写真1列目右から2人目）と、小柳和基臨床工学技士（下の写真2列目中央）に1年間の変化を聞きました。



真生会デンタルクリニック



病院職員は1日の中で大半の時間をユニフォームを着て過ごすこととなります。機能性もデザインも、できるだけ全員が気持ちよく仕事ができるようにと検討を重ね、今回の新ユニフォームに決定しました。フレッシュなターコイズブルーで心機一転、職員も患者さんも笑顔になるように一層努めていきます！

医療秘書課



整形外科に入るスタッフのユニフォームが一新しました。今まで男性はYシャツとパンツ、女性はブラウスとスカートでしたが、医師の診察や処置に付き添うため、その場にふさわしい動きやすいユニフォームになりました。患者さんや職員から「さわやかだね」「かっこいいね」「清潔感があるね」と好評を得ています。

ユニフォームが変わりました！

新任医師の紹介



いわた やすひろ
岩田 安弘医師
(呼吸器内科)

香川県出身。久留米大学卒業後、福岡の病院で勤務し、10年ほど前に縁もゆかりもない憧れの富山へ移住。マイバツグ持参率が9割超えと言われる富山県民の勤勉さに感服する。山登りが趣味であることから、当院から見える立山の風景に愛着を持つ。好きな富山弁は「〜られ」。

(一言コメント)
専門である肺がんは新しい治療法がどんどん出てきています。最先端を学び、患者さんから全幅の信頼を寄せていただけるよう診療にあたりたいと思います。



たなか ひろあき
田中 宏明医師
(呼吸器内科)

愛知県出身。名古屋大学に進学するも、医師を志し富山大学医学部に再入学。地元で初期研修後、当院で2年半、内科全般を経験した。呼吸器専門医の取得を目指して4年前に富山大学第一内科へ。自利他の精神を掲げる当院の理念に惹かれ、今年4月に真生会に戻ってきた。趣味はサッカーで、院内のフットサルサークルに所属している。

(一言コメント)
90歳を超えても元気な患者さんが多いですね。呼吸器疾患だけでなく、一人の方を幅広く、トータルで診療することを心がけています。



電子カルテの作成に携わった
おびはらまさし
情報室の帯原真嗣主任

当院に電子カルテ（患者さんの診療記録を紙ではなく電子システムで行う）が導入されたのは今から12年前ですが、今年の5月3日から新しい電子カルテに変わりました。患者さんの中には、受付機や受付票、番号表示画面が変わったことに気づかれた方もあると思いますが、これも新電子カルテ導入の一環で変わったことです。当院の情報室という部署が院内で電子カルテを作成し、当院にマッチしたシステムを完成させました。患者さんと接することはめったにありませんが、ITシステムを担う情報室スタッフが診療部門を力強く支えています。

電子カルテを独自に作成
情報室

★認知症の方の家族や介護者へ、 関わり方のポイント★

認知症の治療は薬物療法だけではありません。リハビリや地域のサービス等を利用して、残っている身体的・精神的な機能をなるべく長く維持すること、また、ご家族や介護者がどのように認知症の方と接するかということも非常に重要です。

認知症の方のご家族や介護者は、介護を行う中でさまざまな疑問や不安を抱えておられます。適切な対処が取れずに認知症の症状が悪化したり、また、介護する側の心身が疲れきり、介護が続けられなくなる恐れもあります。

今回は認知症の方のご家族や介護者の多くが疑問に思っている、「認知症の方との関わり方」について、ポイントを紹介します（左のページ）。中でも特に1〜3について詳しくお話しします。

●「何もわかっていない」は誤りです。

物忘れが増えたり、今までできていたことができなくなったりする変化に、誰よりも本人が驚き、混乱しているのです。言葉で自分の意志を表現できなくなっても、豊かな感情は保たれています。「どうせ本人はわからないのだから」と、乱暴な態度や子供扱いなどは、認知症の方の自尊心を傷つけ、感情が不安定になり、攻撃的な行動へのきっかけになってしまっています。本人が一番、自分の変化に驚き混乱していますので、自尊心や感情は保たれていることを知りましょう。



●「その人らしさ（個性）」を大切にしましょう。

「認知症だからこうに違いない」と、接し方を決めつけることは避けましょう。人には各々に「個性」や「歴史」があります。たとえ認知症になっても「その人らしさ」は過去から現在へとつながっているものです。「この人の場合、いまは何を望んでいるだろう」と、認知症の方の言葉にできないメッセージを探るようにしましょう。人は「自分らしさ」が尊重されていると感じられる環境であれば、安心して過ごすことができますね。「認知症の人」ではなく、「その人らしさ」に目をむけて接することが大切です。

●「否定よりも肯定」の気持ちで接しましょう。

介護をしていると、認知症の方の思わぬ言動に戸惑うことがあります。誤りや失敗があった時に、強い口調で否定や叱責をしたり、理屈に任せた説得をしていると、認知症の方は罪悪感や孤独感を募らせてしまうことが多くなります。まず、誤りや失敗に対して「大丈夫ですよ」と肯定する気持ちを示しましょう。そうすると、受け入れられることで罪悪感や孤独感とは和らぎ、失敗にめげずに再び意欲を持つことができます。認知症の方が失敗を恐れずに暮らせる環境作りが大切です。また、介護者も一人であれば負担が増えてしまいます。周囲の人達と協力体制を取り、心に余裕を持ちましょう。

☆ポイントのまとめ☆

- 1：その人の自尊心や個性を大切にします。
- 2：言葉になりづらい気持ちを押し量る。
- 3：間違いや失敗を「大丈夫ですよ」と受け入れる。
- 4：何か役割がもてるように支援する。
- 5：言葉だけでなく笑顔やスキンシップも心がける。
- 6：一人ではなく、複数の協力を得て支える。



Dr. 佐々木の中国訪問記

～黄河三门峡病院と調印～

3月26日から31日までの約1週間、中国を訪問した内科の佐々木医師。滞在中の出来事を宮下医療通訳（中国・瀋陽市出身）と振り返っています。



いやあ、中国というのは大きな国ですね！
中国のスケールに圧倒されるばかりでした。

黄河三门峡病院は河南省三门峡市にある公立病院で、病床数は約1,000床です。おそろしく調印式に出ていた10倍くらいのスタッフがいますので、調印式をしながら診療もできるのだと思います。

先生は中国に来られたのは初めてでしたね。
何が一番印象的でしたか？

調印式の後には学術シンポジウムが行われ、私は真生会の理念と日本の内科診療の現状について講演しました。黄河三门峡病院では毎年3月と11月に学術シンポジウムが行われているのだそうですね。今回は第10回目だとか。

何と言っても今回のメインイベントは、黄河三门峡病院と真生会の調印式です。当院はこれまで、中国にある3つの病院と友好協力関係を結んできました。今回4つ目の友好病院となったのが黄河三门峡病院です。調印式の真っ赤なステージは、圧巻でした。

そうですね。日本だけでなくアメリカからも眼科医師が2名招待され、講演がありました。当院からも真鍋院長と館アイセンター長の講演がありました。佐々木先生は別会場でしたね。英語で講演されたのですか？

赤はお祝いの色で、中国の旧正月（春節）のイベントでも赤色や金色がよく使われます。日本の紅白のようなイメージですね。

英語で講演するために移動の飛行機や新幹線の中で一生懸命に準備をしていたんですが…。会場に行ってみたら日本語のできる現地の方が中国語に通訳してくれることになり、なぜか自分の書いた英文を日本語に訳してスピーチすることになったんですね。これも中国訪問の思い出の一つです。（次のページに続く）

病院前の広場に医師や看護師が整列し、私たちがステージに向かっていく様子は、テレビで見る映画の授賞式のような雰囲気でした。しかしそんな中、患者さんが広場の横を通って普通に受診に来られているんですね。多くのスタッフが式に出て大丈夫かと思いましたが……。

診療案内

診療科

内科、外科、小児科、整形外科、耳鼻咽喉科、皮膚科、形成外科、眼科、麻酔科、心療内科、精神科、神経内科、放射線科、泌尿器科、消化器内科、呼吸器内科、リハビリテーション科、腎臓内科、血液内科、循環器内科、糖尿病・代謝内科、緩和ケア内科、真生会デンタルクリニック（歯科）

受付・診療時間

【午前外来】平日・土曜日

受付 8:00～11:30

（診察 8:50～※整形外科のみ 9:00～）

7:45 から整理券を配布します。

正面玄関は 7:45 に開きます。

診療時間以外は、時間外出入り口をご利用ください。

【昼外来】

アイセンター（眼科）のみ

受付 13:30～16:00（診察 14:00～）

※火曜日のみ受付です。

小児科のみ（※火、木曜日のみです）

火曜日 受付 15:00～17:00

（診察 15:00～）

木曜日 受付 13:30～17:00

（診察 13:30～）

【夕方外来】月、水、金曜日のみ

受付 16:00～19:00

（診察 16:30～、※整形外科と眼科のみ 17:00～）

2つ以上の科を受診される際は、午前は 11:00 まで、夕方は 18:30 までに受付をお済ませください。

【休診日】土曜日午後、日曜日、祝日

休診時間帯は、当番医師が待機しております。

※ 2019 年 6 月時点の診療体制です。
診療時間に変更する場合がございます。
事前にお確かめください。

敷地内全面禁煙を実施しています。
（※病院建物内、駐車場、駐輪場すべて）

電子タバコについても
従来のタバコと同様に

敷地内全面禁煙としています。

ご理解とご協力をお願いいたします。



Dr. 佐々木の中国訪問記(前のページから続く)



ところで佐々木先生、本場の中華料理はいかがでしたか？



とにかく量が多い！3日目の会食で、「こんなにたくさん、全部食べきれぬかな」と思っていた料理は前菜でした。一番美味しかったのは小籠包です。三门峡市のある中国の中原地域（黄河中下流域）は辛いものが多いですが、辛い料理も得意です。中国はお酒の文化があって、「酒を飲んだ量で商談が決まる」とも言われるとか。中国と交流するときには、たしなむ程度でもお酒を飲める方が良いのかもしれない。



先生は中国から医療を求めて真生会に来られる方の診療を担当されていますが、今回の中国訪問を経て、どのようなことを感じていますか。



中国の人口は約 14 億人と聞きます。それだけ患者さんの数も多く、中国の医療者が必死に医療にあたっているのを目の当たりにしました。中には待ち時間 10 時間以上というケースもあり、よくこれだけ多くの患者さんを診療できるものだと驚きます。保険制度だったり、薬を手に入れる方法だったり、日本とは大きく異なります。残念ながら医療アクセスはよくありません。当院の理念である自利利他の医療を中国の方にも届けるには、まず中国の事情を理解することが大事です。今回の訪問で経験したことをこれからの中国人患者さんの診療に活かしたいと思います。



黄河三门峡病院の調印式。真っ赤なステージに金色の紙吹雪で豪華に行われました（左）。アメリカの眼科医と握手する佐々木医師（右）。

編集後記

当院で2ヶ月に1度開催している認知症カフェ「カフェ・なでこ」では、医師のミニ講座、ミニイベント、個別相談を実施。中でも個別相談を希望される方が増えています。地域包括支援センターのケアマネジャー、当院の医師、看護師、作業療法士、医療ソーシャルワーカーなど、相談内容に応じて専門家に具体的な悩みを相談できるのが特色です。個別相談から必要なサービスを受けられる医療・福祉・行政機関につながる事例も多いです。ぜひこの機会をご活用ください。カフェの日程は当院のホームページや射水市の広報誌『広報いみず』に掲載されています。